
生き返りに行く

winx

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生き返りに行き帰る

【Nコード】

N8334J

【作者名】

winx

【あらすじ】

「私」が電車に乗り、様々にコミュニケーションしながら、「苦い水」を求めて目的地に着くまでの経過を描く。

（前書き）

時間の無駄になるか。

時間の浪費になるか。

時間の消費になるか。

あるいは。

時間の節約をするか。

それはあなた次第です。

電車に乗った。

その電車は線路の上、南北方向に向かって走行中だったが、私が線路の脇に立って手を上げると、ちょうど私の目の前に乗り口が来る位置で停止してくれた。今日の運転手は気前が良いらしい。運がいい。私は乗り込んで笑った。電車が走りだした。

通路の真ん中に開いている穴から線路に落ちないように、座席の上を歩きながら、私は運転手室の近くまで移動する。部屋の中に入り、彼に声をかける。

「わざわざ止まっていたいて、どうも」

運転手はちよつと、スイカ割りに興じているところだったが、私の声に気付くと手にした棒を床に置き、目隠しも外して、私に向き合ってくれた。

「いえいえ。今日はなぜ電車に」

「ええ。ちよつと、あっちの水が飲みたくなりまして」

「あっちの水ですか。あっちの水は苦いですよ」

「ええ、存じています。でも、こっちの甘い水だけでは、飽きてしまいますからね」

「はは。そうですか」

運転手は笑った。電車がスピードを上げた。

「ところで一つ、お訊きしたいことが」

「なんででしょう？」

私は先程から、この電車の不自然さに気づいていた。乗り込むまでは全然だったが、乗ってしまえば、気づくなという方が無理な話である。

「この電車は一体いかにして、南北に向かって走っているのですか？」

「ああ、簡単ですよ。時速150キロで走っているのです」

「いえ、速度を訊いているのであればありません。私が知りたいのは、方法です」

「ああ、簡単ですよ。時速150キロで走っているのです」

「あ、なんだ。初めから南北に、150キロで走っていたということですね？」

「ええ、そういうことです」

そう言つて、運転手は笑つた。電車がスピードを上げた。

ちょうど良い場所を見つけて、そこで背を伸ばし、電車の屋根を貫通して頭を外に出す。そこでは、何人かの高校生がフリスビーをして遊んでいた。いや、一人だけ背の高い金髪の外人が混ざっているようだ。彼がその手から高速でフリスビーを放つたびに、高校生たちは歓声を上げた。電車がスピードを上げた。

「あ、おじさんもフリスビー、しますか？」

高校生の一人が私の頭に気づいて、笑いながら声をかけてきた。

私も笑顔を作り首を振る。電車がスピードを上げた。

「見ているだけで楽しいよ」

外人も何か、英語で私に話しかけてきたが、あいにく私は英語ができないのだ。先ほどの高校生が通訳をしてくれたが、ドイツ語に通訳されても困る。英語が出来ない私が、はたしてドイツ語ができるだろうか。いや、できない。

そこで私はふと、私の膝当りにをコツコツと叩く感触に気付いた。慌てて頭を車内に戻すと、そこには一台の扇風機が立っていて、私の膝に首をぶつけていた。

「どうしました？」

私は訊く。

「宝箱（すいか）が開かないんです」

扇風機は、泣きそうな声で答えた。

「宝箱（すいか）？」

「はい。とにかく来てください」

私は扇風機についていって、先ほどとはまた違う場所から首を突

き出し、今度は完全に体も出した。ちょうどそこには、確かに嚴重そうな箱が置いてある。

「鍵がかかっているみたいですね。たたき割ってみるのはどうですか？」

「それもやってみたんですけど。スイカの成分が混じっているみたいで、割れないんです」

「なるほど」

私はしばらく考え、名案を思いついた。

「私に考えがあります。少しここで待っていて下さい」

私は車内に戻り、運転席に再び向かった。彼はまだ、スイカ割り続けていた。

用件を話すと、彼は快く、目隠しと棒を貸してくれた。それを持って、扇風機のもとに戻る。扇風機は、今か今かと首を振っていた。

「これで、割ってみましょう」

「はい。よろしくお願いします」

私は宝箱（すいか）に近づき、棒を振り上げて、振り下ろした。しかし箱が割れる気配はしない。

「あの、これをしてみては？」

扇風機はおずおずと、目隠しを首差した。確かに、目隠しをしなければスイカ割りではない。私が目隠しをしてもう一度棒を振り下ろすと、今度はいとも簡単に割れた。

中には、ドイツ語が入っていた。

「これが欲しかったんですか？」

「はい。ありがとうございます」

扇風機は首を振り、嬉しそうに電車から飛び降りた。扇風機は死んだ。私は泣いた。電車が止まった。

「お客さん、着きましたよ」

私を通った穴から運転手が頭を出し、到着を告げる。あっちの水は苦くはなかった、塩の味がした。

（後書き）

初投稿で、ルビの振り方がこれで上手くいくかどうかを試す意味も含めて書きました。内容自体は1年ほど前に考えたものののでスラスラと書くことができました。

電車に乗るのは、好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8334j/>

生き返りに行き帰る

2010年10月12日02時34分発行